Q：『頭の決まりの壊し方』という本を拝読したんですけれども、「時間は実在するか」という項目で、最初のほうに過去と未来は存在しなくて今だけだっていう、今の圧倒的な臨場感とかリアリティーということを書いておられて、そこを足場にして生きていけばみたいなことを書いていらっしゃるんですけれども、

A：はい。

Q：最後に、「今」もやっぱり実在しないということで、

A：足場を掬われたような気分になりましたか？

Q:その、足場をそこに置いてホッとしていればいいんだ、みたいな感じが、「今」も空であるということになって、

A：はい。そうです。

Q：まだ、空ってことはよく分からないんですけれども、どうしたらいいんだろうみたいな感じになっちゃったんですが。

A：ああ、分かりました。ただし、その「空」ってよく分からないって仰りつつも、さっきからの問答はなんとなく聞かれていたら、そこはすごく充実していそうな感じがしませんでしたか？

Q：はい。

A：でしたら、仮にそこが足場になるなら、何の問題もなさそうな気がしませんか？ということです。「今」っていうのがほぼ「空」とイコールなぐらいなんですけど、ほぼ。ただ、その「今」っていうのを観念として思っていたら、「今」っていうのは、あくまでも過去と未来っていうのをあると思っているうえで、それとは違うものとして「今」っていうのがあるっていう、その考え方でしょう、「今」っていうのは。

事実そのものには考え方っていうのは含まれないんですよ。「木がそこにある」とか「空（そら）がそこにある」って説明すれば、言葉であって考えですけど、それそのものを感じることっていうのは、考えっていうのをすっ飛ばしてただ感じているときに、そういう考えとか観念はない、でしょう。それと同じような、今この瞬間の感覚というものに関しても、説明のうえで、「過去とか未来じゃなくて、今ですよ」ってそれは言葉で説明する以上、そう言うしかないんですけど、分かってもらうために。あるいはその感じを感じるためには、日本語を使えばそういう言葉ですし、英語をもし使えば"here and now"とかいうようなことを言えば理解してもらいやすいでしょう、ということで、便宜上人間の言葉を使って表現しているんですが、その現象そのものというのは、人間が頭で考えるよりも前のところに、行こうとしているんですよ。それを、人間が頭で考えたあとのもの、そもそも言葉になる一個前の段階も、言葉以前の領域も、すでに頭が作ってるんですよ。頭は言葉抜きに考えることもできる、感情を作ったりすることもできるので、それをさらに言葉に置き換えているので、頭が作ったものをさらに言葉に作り直すっていう、二重に変形された、現実そのものから遠ざかったものなんですね。

「今」っていうのは、あくまでも考え方であって、観念であって、もし未来と過去っていう観念がないとしたら、「今」っていうのは人間は理解できないはずです、言葉として。「今」っていうのは、「未来があって過去っていうのがあるからそうじゃない今なんだな」って思ってるはずなんですね。そういう、他の対立概念があって、「光があるから闇がある」みたいな感じに、概念として、考えられたものなんです、今っていうのは。ただし、今そのものが本当に分かっていたときに、過去と未来というのはなくなってしまえば、時間というのが解けてしまうんですよ。時間というのが解けてしまって、ただあるだけ、なんです。ただ圧倒的にあるだけ。「ただ圧倒的にあるだけ」を、言葉で仮に、みんなが分かりやすいように、「これが、永遠の今なのです」とか言えば、「おお、そうですか、永遠の今ですか！」という感じに‥‥それも悪くないんですけど、間違いではないんですけど、ただより厳密に言えば、その「永遠の今」というのは観念なんですよ。「永遠の今」って考えたくさせるほどの威力のある現実は現実としてあるんですが、それをワーッて感じたあとに、これを言葉で表現すれば永遠の今だな、って二段階くらい編集を経てるんですよ。それはあくまでも編集だなっていうふうに、執着を放して捨てていったときに、何が残るのかというと、「今」というのは残らない、ということです。現在とか過去とか未来とかいうのはなくて、「ただある」だけだ。現実はただあって、ただ流動しているだけなのです。ものすごい細かいエネルギー体が、ただ流動しているだけで、「ただそれがあるだけ」なのです。過去も未来もなければ、今もなくただ充満しているだけ、ただ満ちているだけ、何にも欠落していない、ただ圧倒的に YES だけ、何の問題もない、完璧。今も過去も未来もない、というようなことですね。それをなんとか言葉で表現しようとしたら、「永遠の今」と言っても悪くはないんですけど、でも「今、今、今」って、今に執着しても、それも観念、だからな、というような、と説明すればなんとなく腑に落ちていただけましたでしょうか。

Q：はい。どうもありがとうございました。

A：どういたしまして。それは、確固たる足場になるもので、足場が何にもないんじゃないだろうか、と心配するようなことはないことです。

（テープ起こし：e）